

あらゆる小説はおもしろい、の壁

阿部公彦

本欄の担当も最終回。今後一生この欄を担当しないかと思うと一抹の寂しさもあるが、ともかく終わってほっとする。何度も作品を読んだ書き手の方々には「では、ごきげんよう」的に、身勝手な馴れ馴れしい気分が湧く。小説は読者の興味を引くのがジャンルの根本特性で、振り返ればほとんどの作品がそこそこおもしろく読めた。ただ、「そこそこ」以上かどうかは、やはりきびしい世界だ。「そこそこ」ラインを越えようとするれば、誤って崖下に落下する危険も伴う。そういう意味で今回の「文学界」新人賞の三篇併置は興味深い。受賞作は板垣真任「トレイス」。もはや文芸誌の定番と化しつつある老人介護のテーマを扱った作品で、するつとした饒舌さに物語の匂いをぶんぶんとさせる技量があるが、あちこちで意味づけの癖が目立って、最終的には物語の推進力が意味づけ衝動に根負けしている気がした。よくまとまったが、ちよつ

と小さくはないか。これに対し、小笠原瀧「夜の斧」と森井良「ミックスルーム」は受賞を逃した佳作。たしかにどちらも「こりゃあかん」と思わず偽関西弁で吹きなくなる力んだ不器用な表現があり、前者は意味不明な文も多数、後者は構成がよろよろと腰砕け気味。ただ、ダメ親父をめぐる鼻をつくような不潔で陰惨で閉塞感漂う兄弟の闘いを描いた「夜の斧」の世界には、鼻をつまみながらも引き込まれたし、精神病と同性愛とが交錯する「ミックスルーム」の世界は意味づけから遠く隔たつて、こちらの方が言葉を失いそうな地点もあった。後者は遠心性過多で、精彩を放つ細部がありながら全体としての完成度に難があっただけに活字化を急いだのが惜しまれる。同誌のもう一篇、鈴木善徳「じゃあぼ」は淡々と丁寧な死者が集う幽霊譚を語り、いわば無情緒の情緒をめざすが、「そこそこ」感は達成している一方、作品として飛び立ち

きれない印象。以下、雑誌単位でいくと、今回とりわけ元氣だったのは「早稲田文学」。転落を恐れぬ「そこそこ」の壁への果敢な挑戦が目立った。「泥棒とイーダ」の牧田真有子は、過去の「善行」がむしろトラウマになって人物たちに襲いかかる妙な心理を、まるで読者の腕をつねるような意地の悪い比喩やキレのいいやり取りを効かせて緊張感を生むいじめやボランテニア集団の設定に鼻白みそうになるが、また総じて読者サービスもあんまりないが（つねりだけは頻繁、珍しいタイプ）の観念小説の試みとして評価したい。小野正嗣の「悪の花」は、老婆の人生を描き出す際のマクロとミクロの話の切り替えが絶妙で、叙情性と物語性とがうまくブレンドされ、小さいスペースなのに実に陰翳のある世界が浮かぶ。「タイコー」や「悪の花」を出すタインギンもいい。似顔絵を描いた罪と罰を主人公が引き受ける太田靖久「ボディーズ」は、

あれよあれよと話に花が咲く前半の展開がよく、後半、話が大きくなりすぎてやや大味だが、十分楽しめる。実写にCGをまぜこんだような谷崎由依「シリカ、マリリカ」も、人間であつて人間でないような世界をスマートに描く。よけいな自意識に足をとられずに済んでおり、書き手に合ったスタイルと見た。豚に生まれ変わった豚守のことを描く堀井拓馬「いつかさよならに良い日まで」は、荒唐無稽ながら豚の鼻の娘が生まれるところなどやはり楽しい。最果タヒ「星か獣になる季節」はアイドルのからんだ殺人事件を猛烈なスピードの書簡体で語る。横組も高速化が狙い？ストーリーにはつきあえなかったが、ばらばら漫画的な新しい言語への挑戦。早慶戦の流れで言ううと、ライバル「三田文学」は全体に足場固めが目につく。石田千「夏の終わり」はやわらかで端正なたずまいから漏れ出る悪意や嫌悪感をとらえた作品で、ぎゅつと緊張し赤らむ主人公の感じがよく出ている。その彼氏があまりに無臭なのは、あるいは同著者の他作品で補足が可能かもしれない。狗飼恭子「天国を掃除」、村松真理「野薔薇と青空」、庵原高子「源平小菊」は小説世界を守ろうとする姿勢はよく伝わるが、村松作品は

科白際のテンポが悪いのと、途中で明かされる内情が仕掛けのための仕掛けとしか読めない。狗飼作品は同じく凝つた設定のわりに人間関係が安全で弛緩している。庵原作品は、こんな花の名前がたくさん出る作品は今時珍しいが、展開にあまりに既視感が漂う。「すばる」は吉原清隆「小説学校の女」がいい。作家志望の主人公が老婆の抱え持ったかけがえのない物語と出会うという展開はまさに「小説学校的」おとぎ話風美談だが、前半の毒とたくらみに満ちた話術は光った。いろいろできそうな書き手だ。天竺裕文「ママなんて呼んだことないぜ」は、マザコンネタでどこまで引つ張れるか見物で、最後まで読むと案外な骨太さがないではない。ただし、長すぎ？男でも乳が出るとはちよつとした発見でした。上村涉「三月と五月の欠けた夢」は火事を発端に家族のきしみが明らかになる話で、最終的には介護小説に落ち着く。想像以上に湿り気過多だった。喜多ふありは以前の「すもも太郎」がすばらしく期待したが、今回の「堀江に住むという男」はギャグが滑り気味で少し残念。「新潮」は高尾長良「影媛」が話題。ちゃん最後まで読んだけど、たいへんでした。古代的なリズムを通して今の日本語では

できない何かを呼び起こす試みは立派で、何らかの体験は得られるものの、話の枠は案外ふつうに近代的では？とも。いしいしんじ「海と山のピアノ」はいつもながら文章もイメージも物語もきれいだが、もう少し汚い容器に入れてみたい誘惑が。宮崎善子「笑う門には老い來たる」はこれまで介護小説で、「娘は生理中に不機嫌で、私は生理前に不機嫌になる」的なブログっぽい文章が延々とつづいた。谷崎由依「蜥蜴」はまさに典型的な「そこそこ」小説。カッパルの葛藤も、最後の変身譚の仄めかしも、それほどどきどきとせず。「群像」の宮下遼「無名亭の夜」は伝聞調風の枠を駆使してアラビアンナイトの世界を現代にのみがえらせる。何より著者の表現力には敬服。言葉がぎつしりつまる快樂に溢れる冒頭部の語りからはじまり、きめの細かい文章の読み心地がいい。後半部にかけてもすばらしい描写が何カ所か（二四七頁、一五五頁など）。後は芯となる物語にもうちよいひねりがあれば、というわけで、恒例の下半期五本は、小谷野敦「又エのいた家」（學）、朝比奈あすか「ザビエルが欲しい」（群）、小野正嗣「九年前の祈り」（群）、高橋弘希「指の骨」（新）、上村亮平「みずうみのほうへ」（す）。